

キリシタン・ローマ字文献における s とその異体字について

千葉 軒士 (名古屋大学大学院)

要旨

日本の中世キリシタン文献ローマ字版本では s とその異体字の f が用いられる。なぜ同一文献内で二つの文字が使われたのかを検討し、その分布と活字の特徴から使い分けの要因・機能差を推定した。キリシタン版で用いられる s と f は分布としては前者が主として語末で用いられ、後者が語頭・語中でのみ用いられている。しかし s は語頭・語中でも用いられており、その要因として f の右上部が後続する文字に付された diacritical mark との接触を嫌ったとの説に従い詳細に見ると、この際には s が選ばれたものと考えた。ただ diacritical mark の ^ と ˇ でも用いられやすさには違いがあり、s は ^ と ˇ で比べ f と接触しやすい形状を持つ ˇ の前でより用いられやすいことがわかった。f を細かく観察すると、この活字は右下部分がなく、後続する文字と重なることでスペースを節約することのできる活字であることから説明できる。s と f は単なる環境変異ではなく、s が語の切れ目を主に示し、f がこれ以後も語が継続することを積極的に示すという役割も担っていたという可能性が考えられる。

1. 問題の所在

16～17 世紀にかけて作成された日本の中世キリシタン文献ローマ字版本では、s とその異体字の f が用いられる。以下に示す。

Deus uo fôqjô xi

(Deus を 崇敬 し)『ヒイデスの導師』78r11

iyoiyo sôqjô xezumba

(いよいよ 崇敬 せずんば)『ヒイデスの導師』4r07

この影印を見ると、「崇敬」という語を示す際の語頭に s と f が用いられている。なぜこのように二つの表記がなされたのであろうか。

この点について山田(2003)では、s と f について以下のように記している。

双方向に置換可能ということは、自由変異ということであり、一方向に置換可能ということは、環境変異(文脈変異)ということである。例えば、ギリシャ文字、ラテン文字(ローマン体、中世印刷文献)では Σ、S の小文字において、異体字が表 2 のように現れる。

f と s は、キリシタン版のローマ字文献でも、ラテン文字は同様の分布を示しているが、ヨーロッパにおける horn book に記されたアルファベットには、f と s を別に記したのものも存在する。

表 2 : 環境変異の異体字の例

	語頭中	語末	
ギリシャ文字	σ	s	大文字 Σ では中和
ラテン文字	f	s	大文字 S では中和

(pp.14-15)

この指摘に従えば、sとʃは、環境変異として使い分けられていることになる。しかし影印の例で示したように、語頭にsを用いた例も確認することができ、この山田の説明だけでは不十分であろう。上例のように同一語にsとʃが用いられることから、発音の違いによる環境変異とも言えない。なぜsとʃは同一文献内で共に用いられたのか、本論では、この点をより細かく精査していくことを目的にする。

2. 語頭・語中・語末ごとの使用数

sとʃについて考察するにあたり、キリシタン文献ローマ字版本で用いられるsとʃの使用数をみた。この精査で得た使用総数を山田(2003)に従い、語頭、語中、語末ごとの使用で分けた。以下の表1で示す。

・表1 sとʃの環境における使用数

		総数	語頭	語中	語末
サントスのご作業(1591)	s	1384	103	108	1173
	ʃ	10195	4240	5892	0
ヒイデスの導師(1592)	s	2439	53	311	2075
	ʃ	8679	3217	5462	0
ドチリナ・キリシタン(1592)	s	288	9	33	246
	ʃ	1548	580	956	0
天草版平家物語(1592)	s	164	33	124	7
	ʃ	6632	3071	3560	0
伊曾保物語(1593)	s	36	6	22	8
	ʃ	1708	946	761	0
金句集(1593)	s	8	3	5	0
	ʃ	602	313	287	0
コンテムツス・ムンヂ(1596)	s	678	0	62	616
	ʃ	4644	2161	2466	0
ドチリナ・キリシタン(1600)	s	278	0	16	262
	ʃ	1942	765	1177	0
スピリツアル修行(1607)	s	1807	57	241	1509
	ʃ	9718	3934	5766	0

1

表1から使用数を見ると、sは主として語末に用いられているが、語頭・語中でも用いられているのに対し、ʃは語末では一切用いていないことがわかる。キリシタン版におけるsとʃの分布を整理すると、以下のようにまとめることができる。

1 語頭・語中・語末の識別はキリシタン版の分かち書きを指標とした。

・表2 s と ʃ の分布

	語頭	語中	語末
s	○	○	○
ʃ	○	○	×

これが筆者の調査したところの s と ʃ の関係である。語末に ʃ が出ないことから何らかの使い分けがあると推定できる。なぜこのような使い分けをしたのか以下、考察していく。

3. diacritical mark²に前接する s と ʃ

山田(2003)では先ほどの引用箇所以下に以下の脚注を施している。

実際には語中においても稀に s が現れるが、これはほぼ *õ* や *ö* などの前に現れるようであり、組版上、ʃ の頭の部分が、次文字の *˘* や *ˆ* といった上付きの diacritical mark との接触を嫌ったものと思われる(中略)。

主として語末で用いられる s がなぜ語中で用いられたのかは、後続の文字の影響であったことが考えられている。この点を詳細に見ていく。そこで、まず語頭、語中で用いられる diacritical mark 別の s と ʃ の使用数を数えた。以下に示す。

・表3 diacritical mark 別の使用数(/ の左に語頭、右に語中での使用数を示す)

	s ^õ	ʃ ^õ	s ^ö	ʃ ^ö	s ^ü	ʃ ^ü	s ^{~³}	ʃ [~]
サントスのご作業	29/35	3/5	69/18	31/3	2/4	1/0	0/1	2/0
ヒイデスの導師	51/46	13/9	2/1	22/14	0/0	0/1	0/1	3/0
ドチリナ(1592)	6/5	0/0	3/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0
天草版平家物語	31/99	36/40	2/11	36/38	0/5	0/6	0/0	9/9
天草版伊曾保物語	5/16	5/30	1/1	23/5	0/2	0/9	0/0	1/0
金句集	3/1	0/3	0/0	2/4	0/1	0/5	0/0	0/0
コンテムツス・ムンヂ	0/1	27/14	0/0	14/2	0/1	0/0	0/0	3/1
ドチリナ(1600)	0/2	3/7	0/0	5/0	0/0	0/0	0/0	7/3
スピリツアル修行	51/33	5/3	1/4	15/7	3/3	0/0	2/6	2/2

この表3で示したものを語頭・語中に用いられる s について考察するために、s に‘上付きの diacritical mark’が付されたものの総数を示す。

² diacritical mark は、発音を区別するための符号のことである。例えば、文字の a の表す音を区別するために *ā*, *ǎ*, *ä* のように添加する符号である。

³ s に後続する母音に *~* (til) が付されるものを s *~* で代表させる。

表4 sに後続する diacritical mark の総数(/ の左に語頭、右に語中を示す)

	総数
サントスのご作業	100/58
ヒイデスの導師	53/48
ドチリナ(1592)	9/5
天草版平家物語	33/115
天草版伊曾保物語	6/19
金句集	3/2
コンテムツス・ムンヂ	0/1
ドチリナ(1600)	0/2
スピリツアル修行	57/46

ここでまず表1と表4を比較しよう。語頭で用いられているsの例は『サントスのご作業』の3例を除いて、全て diacritical mark が後続している。このことから語頭に用いられるsは、後続する文字の影響で「ではなくsが選ばれたと考えられる。

では『サントスのご作業』の3例はなぜ語頭にsを用いたのであろうか。以下に影印を見よう。

S. EVSTACHIONO^{275.}
 go sagueô, narabini sono
 MARTYRIO NO YODAI: CORE. S.
 ANTONINO NO CAQI TAMO
 jôguarato, Pedro anatalibus to
 yñ Bilpo no qirocu ni
 miyetari.

『サントスのご作業』巻1 275

この例の2行目の sagueô(作業)、sono(その)は語頭にsが用いられている。ただ、この例は文献の本文として用いられたものではなく、話の小題としてのタイトルを示すために用いられたポイントの大きい文字である。残る1例もこれと同様である。この3例を除く表4で示した全ての語頭で用いられるsは、タイトルではなく本文で用いられたものである。この例は他の例とは用いられた環境が異なる⁴。

この例を除けば語頭でsが用いられたのは後続する diacritical mark の影響であるといえる。

⁴ なぜポイントが異なると語頭に「ではなくsを用いたのかは現時点では言及できない。今後の課題である。

3.1 ^ と ˇ の形状の違い

ここまでで、山田(2003)の指摘の通り、語頭に s が用いられることは diacritical mark が影響する可能性を示した。しかし、表 3 を今一度精査するとまた別の傾向があることがわかる。sö, fō, sō, fō に注目しよう。今回の調査対象としたキリシタン文献ローマ字版本 9 冊における sö, fō, sō, fō の総数を示す。

・表 5 キリシタン版における sö, fō, sō, fō の総数

	sö	fō	sō	fō
総数	410	203	113	222

この表を見ると、sö が最も用いられ、sō の使用数は少ない。このように多用されるものと多用されないものがあるのはなぜだろうか。そこで注目すべきは sö とその異体字を用いた fō、また sō とその異体字を用いた fō との比較である。sō と fō では前者が多用され、sō と fō では後者が多用されている。このいずれかが使用されやすいという傾向を使用率で示そう。使用率は以下のように出した。

使用率 = $s\ddot{o}$ (または fō) / $s\ddot{o}$ と fō を足した総数

使用率 = $s\acute{o}$ (または fō) / $s\acute{o}$ と fō を足した総数

・表 6 sö, fō, sō, fō の使用率

	sö	fō	sō	fō
使用率	66.8%	33.1%	33.7%	66.2%

5

この表 6 から後続する文字により、s と f は主として用いられるものが変わることがわかる。なぜこのように後続する文字で s と f のいずれかが選択されやすいという傾向が生じるのだろうか。ここで実際に sö, fō, sō, fō の影印を見て考えよう。以下に示す。

söy söy(相違) 334v11 fōuō fōuō(相応) 371r16

zansō zansō(譏奏) 169v04 fōqiō fōqiō(崇敬) 12r22 用例は全て『スピリツアル修行』

ここで注目するのは ˇ という diacritical mark は上に開かれた形状を有しているために、f の文字の右上部と重なりやすいということである。この文字と diacritical mark が重なり判別しにくくなることを避けたためであろうか、ö に前接する際には f よりも s が用いやすいようである。これは山田(2003)の指摘の通り、f の頭の部分が、次文字の diacritical mark との接触を嫌ったためであろう。一方 ^ は下に開かれた形状をしているために、f とは重なりにくい。そのために ö の前では s よりも f が用いられやすい。これは活字の形状を考慮に入れた組版上の都合によって、このような差が生じたのでであろう。diacritical mark の中でも f と共起しやすいもの、

5 %表示は小数点第二位以下切り捨て。

しにくいものがある。

4. 「という活字

本節では「の特徴に注目する。前節で diacritical mark が付されたときに、接触を嫌い s が用いられることを指摘した。では diacritical mark が後続しない際に「はどのように用いられているのか確認しよう。以下の影印を見る。

fi fu fe fo 『サントスのご作業』巻2 8丁より

これを拡大してみよう。

fi fu fe fo

この例から、明らかに「の活字はその後続する活字の左上部を覆っていることがわかる。とすると、この「の活字は四角ではなく右下部がないものであることがわかる。この右下部に後続する活字が入り込んでいる。このことから、「は s よりもスペースを節約することのできる活字であったと想定してみる。このようなスペースを節約するという機能を「が有していると考えれば、そもそも「は文字が後続しない語末で使うことに利点はない。「は語頭・語中に用いることに利点のある活字ではないだろうか。

しかし語中の行末で「は用いられる。以下に示す。

mocu to uo voxije tamaj, amata no ninju uo Chriſ
tan ni uaxi tamō nari. Mara Marte toyū Fotoqe uo

『サントスのご作業』巻1 124-11

上の例の1行目末の Chriſ という語に注目しよう。これは Chriſtan という語が2行にわたり記されたものである。ローマ字本では二語を結びつけたり、一語を行末で区切って二行に分けて書いたりする際に - (hyphen) が用いられることがある。ただ上で示したように - を用いないものもある。ここで、- を用いずに「を用いているのはなぜだろうか。このような例は s にも見られる。以下に示す。

fiſono nari e- iyeri. Sono tōqi, Varadach cono Apos
toſtoſi nōnōdō ſūru coto can ſbeqi ya, inaya to, iye-

『サントスのご作業』巻1 143-17

上の例の1行目末の Apos は、Apostolo という語が - を用いずに2行にわたって分けて記されたものである。このように語中の行末に「と s が用いられている。そこで、まずこのように - を用いずに行末で用いられる s と「の使用数を数えた。以下の表7で示す。

・表 7 語中の行末に用いられる「と s の使用数

	s 行末	「 行末
サントスのご作業	1	30
ヒイデスの導師	4	16
ドチリナ(1592)	1	0
天草版平家物語	0	4
天草版伊曾保物語	0	0
金句集	0	0
コンテムツス・ムンヂ	1	5
ドチリナ(1600)	1	3
スピリツアル修行	0	2

表 7 から、語中の行末に用いられやすいのは「であることがわかる。ではなぜ、「が用いられやすいのか。ここで先ほどの「という活字がスペースを節約できる活字であるために語頭・語中で用いることに利点があるということ考慮に入れると、「の利点がここではいかされていないことになる。しかし「が語末では使われないということ考慮に入れると、一がなくてもこの文字の後も語は続くということがわかる。このことから s と「は前者が語末、後者が語頭・語中で用いられるという単なる環境変異ではなく、s が語の切れ目を主に示し、「がこれ以後も語が継続することを積極的に示すという役割を担っていたと捉えるのがよいのではないだろうか。そのために「は語末で用いることはできなかった。このように考えるのであれば、なぜ「の活字が右下部がない活字であったのかは、スペースを節約するのみではなく、そもそもこの活字は文字が続くことを考慮に入れて、作られたと見ることもできるだろう。

5 語中の s について

5.1 fs について

主として語末で用いられる s が語頭・語中で用いられやすい条件の一つとして diacritical mark の影響を示したが、もうひとつの表れやすい条件として、s が重なって用いられる場合もある。この際に語中で s が用いられることがある。以下に示す。

ifsai (一切)『ヒイデスの導師』413-17

iffai (一切)『ヒイデスの導師』478-16

同じ「一切」という語を示す手段として fs と「f という二通りがある。このように語中で用いられる fs と「f の使用数を数えた。以下に示す。

・表8 fs と ff の使用数

	fs	ff
サントスのご作業	24	86
ヒイデスの導師	258	50
ドチリナ(1592)	24	33
天草版平家物語	9	40
天草版伊曾保物語	2	7
金句集	2	9
コンテムツス・ムンヂ	11	79
ドチリナ(1600)	12	54
スピリツアル修行	191	45

6

『ヒイデスの導師』と『スピリツアル修行』では fs が多用されるが、残りの版本では ff のほうが多く用いられている。ここで、この影印をより細かく見よう。

ifsai **iffai**

ifsai の例では s の上に f の右上部が覆い、iffai の例では a の上に後ろの f の右上部が覆っている。どちらの f も後続する文字の上を覆って用いられている。このことを前節で確認した f の活字の特徴を考慮に入ると、fs と ff はそのいずれを選択しても、スペースを節約できることに変わりはない。ここから fs と ff はいずれを選択しても、後続する文字の上部を多い、スペースを節約することになる。そのために fs と ff はどちらも用いられ、前者を選んだ際に語中で s が使用されたのだろう。

5.2 st について

語中に表れる s の要因としてもう一つ合字の可能性を指摘する。『コンテムツス・ムンヂ』の語中の s は diacritical mark による影響、fs としての使用、だけでは説明することができない。これは書体の問題が大きく関わると考えられる。今回調査したキリシタン文献ローマ字版本が多く直立体で記されるのに対し、『コンテムツス・ムンヂ』は主にイタリック体を用いているためである。この書体に伴い st の表示方法が異なる。以下に示そう。

Christan

『サントスのご作業』巻2 44-09

Christoni

『コンテムツス・ムンヂ』 198-04

直立体を主に用いる『サントスのご作業』では it をとり、イタリック体を主に用いる『コン

6 今回の調査で ss, s f と綴られる例は確認できなかった。

テムツス・ムンヂ』では st をとっている。『コンテムツス・ムンヂ』内でこのような st は 47 例ある。キリシタン文献日本文ローマ字版本で st の表示に際し、直立体では主に ft を、イタリック体では主に st を用いるようである。またこの ft と st を見ると、この活字は繋がっているようにも見える。この st はひとつの合字であると考えることが出来る。

このように考えると、なぜ『コンテムツス・ムンヂ』で語中に s が用いられたのかは、『コンテムツス・ムンヂ』がイタリック体で記され、st という合字の活字を用いたために語中で s が用いられたといえよう。これは s の語中例としては例外となる。

6. 本語の文献で用いられる s と f

ここまで日本のキリシタン文献ローマ字版本を見てきたが、s と f が音の反映ではなく、後続の活字など環境によって使い分けられていることを示した。とするならば、このように二つの表記がなされたのは当時のキリシタンたちの母語である本語の文献を作成する際の方式がそのまま引き継がれたものと考えることができよう。そこで当時のポルトガル語の版本でこの二つの文字がどのように利用されていたのかを検討してみる。亀井(1983)に影印がなされている「Doctrina Christã Ordenada a maneira de Dialogo, pera ensinar os mininos, Lisboa, 1602」(以下「Doctrina 1602」)で用いられる s と f を精査した。以下に総数を示す。

・表9 「Doctrina 1602」の s と f の使用数

	総数	語頭	語中	語末
Doctrina 1602 s	2128	0	122	2006
f	1889	669	1220	0

「Doctrina 1602」においても、f は語末で用いられない。s は語頭では用いられず、語末を中心として用い、語中でもわずかに用いられている。語中で用いられる s の 122 例のうち、前節で示した fs として 60 例、合字の st として 48 例が用いられる。残りの語中で用いられる 14 例の s はどのようにして用いられているか見ていく。以下に示す。



この 3 例の特徴として、s に後続する文字は縦に長く記される文字が用いられている点あげられる。「Doctrina 1602」では「b、f、h」の例はなく、sb が 3 例、sl が 3 例、sh が 4 例用いられている。3 節で触れた後続する diacritical mark の影響で s が選ばれたのと同様で、後続する文字が縦に長く、文字が重なり判別しにくくなることを避け、f を用いずに s を用いたのではないか。この点から、語中で「だけでなく s が用いられたのは後続する文字の影響であったとも考えられる。

s と f の語頭・語中・語末での分布が本語の文献と日本のキリシタン文献ローマ字版本でほぼ重なり、またともに後続する文字等の影響で語頭・語中で s が用いられているならば、s と f の使い分けは本語における当時の使い方の反映に過ぎない面があるともいえる。ただ 3 節で触れた diacritical mark の影響は日本語を記すための特別な面も備えている。s と共起されやす

いゝという diacritical mark は丸山(1988)によると外国語記述のために新鑄されたものとして
いる。とするとゝは本語を示すためではなく、日本文のローマ字版本で主に用いられたこと
になる。このゝとの接触を避けてsを用いたのは、単にヨーロッパでの使い方を反映したの
ではなく、日本文ローマ字版本を作成する際に、本語での使い方を変更したともみてとれるだ
ろう。ただsとfは本語・日本語のローマ字文献のいずれにおいても音の違いを示すためなど
ではなく、sが語の切れ目を主に示し、fがこれ以後も語が継続することを積極的に示すとい
う役割を担い、用いられていたのであろう。

7. まとめ

本論ではキリシタン文献日本文ローマ字版本でのsとfの使用法についての考察を中心に行
い、以下のことを確認した。

- ・ キリシタン版で用いられるsとfは前者が主として語末で用いられ、後者が語頭・語中
のみ用いられていた。sが語頭・語中で用いられる要因として後続する diacritical mark の
付された文字の影響が考えられた。ただ、sはゝとゝで比べるとfと接触しやすい形状を
持つゝの前でより用いられやすい。
- ・ 語末で用いられないfは右下部のない活字であり、後続する文字と重なることでスペース
を節約することのできるものであった。
- ・ sとfの環境変異による二次的な機能として、sが語の切れ目を主に示し、fがこれ以後も
語が継続することを積極的に示すという役割も担っていたという可能性が考えられる。

引用および参考文献

亀井孝(1983)『日本イエズス会版キリシタン要理』岩波書店

丸山徹(1988)「キリシタン資料「開合表記」成立の背景」南山国文論集第十二号

山田健三(2003)「異体字とマークアップ」『東洋学へのコンピュータ利用第14回研究セミナー』(京
都大学人文科学研究附属漢字情報研究センター・京都大学学術情報メディアセンター)

※使用テキストは、各種複製本によった。

本稿は第37回名古屋言語研究会(於名古屋大学文学部、2006年7月15日)での口頭発表を基にしたも
のである。席上、多くの方より貴重な御意見・御教示を頂いた。またその後、丸山徹氏、豊島正之氏、
山田健三氏には貴重な助言を頂いた。以上各氏をはじめ、お世話になった全ての方々へ心より御礼申し
上げる。